

写真引き 60年前の鮎川浜のすがた（浜の棟梁・鹿井清介が撮影したくらしと祭り 鮎川浜 1950年代）

著者	鹿井 清介，加藤 幸治，成澤 正博，佐藤 麻南，加藤幸治ゼミナール
雑誌名	東北学院大学論集．歴史と文化
号	60
ページ	41-133
発行年	2019-03-22
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024169/

写真引き

60 年前の鮎川浜のすがた

鹿井 清介・加藤 幸治・成澤 正博・佐藤 麻南

加藤幸治ゼミナール

【3年生】

小笠原 涼・金 美乃里・菅原 美咲・畠山 稜平・矢葺 隼也・上野 果菜・
佐藤 達哉・佐藤 千夏・須佐佳奈子・渡邊 愛・菊谷 誠人・小池 和香・
佐藤遼太郎・鈴木 理沙・中嶋 瑞希・八木橋克顕

【4年生】

相澤 春希・赤間 大記・伊藤 彩華・小原茉莉子・川嶋佐知子・熊谷 爽佳・
三浦 衣織・杉内 香奈・菊池 平・真田 遼海・津花 麗・栗原 和輝・
長野 香純・松橋 元春・三浦 万帆・渡邊 拓也

凡 例

- ここに掲載する写真は、鹿井清介氏（宮城県石巻市鮎川在住）が一九五〇年代を中心に撮影した鮎川浜の写真である。写真は鹿井氏本人よりネガをお借りしてデジタル化したものと、成澤正博氏（宮城県富谷市在住・鮎川の風景を思う会代表）から提供されたプリントのスキャニング・データとを整理し、重複する写真を削除するなどして掲載するものである。ただし、極めてプライベートな写真については選別して非掲載とした。
- 写真を1. 風景、2. 捕鯨、3. 漁業、4. 鯨まつり、5. 暮らし、6. 金華山の6つのカテゴリーに分類し、IDは写真の分類上付けたものである。IDは6つのカテゴリーにそって付けた。
- 牡鹿半島以外で撮影された写真に関しては、写真の右下に撮影場所について記した。
- 写真引き（画像に番号を付けて注釈をつけたもの）は、加藤幸治ゼミナール3・4年生が鮎川浜で聞き書きを行って作成したものをもとに、加藤幸治・成澤正博・佐藤麻南が追記して作成した。

●写真 1-7



鮎川の沿岸部を旧牡鹿町役場付近の丘から撮影したもの。鮎川を一望するにはこの場所が最適だったという。しかし、埋め立てなどが行われたため現在同じ景色は見ることはできない。映画館や商店、捕鯨会社などが多くみられ栄えていたことが分かる。

- ①漁連の冷凍庫…大きい氷を削って漁船に積む。
- ②燃料補給タンク…船に積む燃料。漁業協同組合が貯蔵していた。
- ③映画館…鮎川映画劇場。上映されるのは任侠ものが多かった。二階建てでスクリーンはひとつ。次第に洋画も入る。
- ④栗野旅館…木造三階建の立派な旅館。前にバス停があった。旅館内で郵便局も経営しており、そこではバスの切符も売っていた。
- ⑤鯨館診療場…二階建ての建物で、一階が診療室、二階が病室だった。ここで診察しきれないほどの怪我・病気は牡鹿病院に行った。小野先生（内科）が診療していたので「小野医者」とも言った。
- ⑥役場…牡鹿町役場の屋根。
- ⑦バスの停留所…仙北鉄道バス（現在の宮城交通）の車庫だった。
- ⑧イトッコ屋…たたみ3畳ほどの小さな店。ところてん、カキ氷など量り売りをしていた。1円飴や味のついた紙（クジ）を舐めていた。ハマグリに甘い味付けをしたものも売られていた。
- ⑨海員寮…昭和二三年に設置された極洋捕鯨の寮（極洋会館）。昭和二五年には大洋漁業が「大鯨荘」を設置。
- ⑩畑…トミジさんの家の畑。大根、きゅうり、なす、ほうれん草、肥やしを肥料にしていた。天秤棒を使っていた。
- ⑪公民館…二階建てで大きい。北島三郎が公演で来たこともある。
- ⑫郵便局…昭和三四年に栗野旅館内の郵便局から移転した。その後再度移転し派出所となる。
- ⑬家…カクトさんの家。
- ⑭事業所…鮎川の戸羽捕鯨の事業所。
- ⑮鮎川橋付近にあった劇場…建つ前は、バラックの建物でござの上で見っていた。
- ⑯牡鹿病院…外科・内科。鯨館の後にできた。二階建て。
- ⑰大洋漁業の解剖場…飛行場の格納庫を払い下げて移築した大きな解剖場。地域の人々は鯨をもらいに行っていた。
- ⑱道路…木炭バスがギリギリの道幅で走っていた。
- ⑲鮎川橋…一九五七（昭和三二）年に完成。鯨まつりの時に仮装行列や鮎川音頭に合わせて盆踊りが行われていた。

●写真 1-40



港での日常を切り取ったある場面。コバルトライン開通後、観光客の車やバスなどが多く停まっている近くに肥料工場があった。一帯が肥料工場になっていたため、肥料の臭いが鮎川のにおいと言われるほどに満ちていた。肥料の臭いを最初は臭いと感じていたが、慣れたら大丈夫になったようだ。その臭いを「金の匂い」といって笑う人もいた。

- ① 棧橋…捕鯨船が着く棧橋。
- ② 看板…橋本の工場にある看板。「鯨まんぢゅう 長寿万重」の文字。実際に、ここでは鯨まんじゅうは売っていない。もともと名物を作ろうと鯨のように大きなまんじゅうを作ったのが最初。クジラの形をしているわけではない。鯨まんじゅうは、葬儀などにも重宝され、単なるみやげ物という以上に生活に欠かせないものであった。
- ③ 寺…観音寺。現在の本堂は一九六二（昭和三七）年に完成した。
- ④ 家…丸浄丸というミンク船を所持していた。
- ⑤ 家…鈴木文太郎さんの家。肥料工場を営んでいる。
- ⑥ 船…寿丸と銀星丸（鉄製）。
- ⑦ 船…船の先端にメロド漁用のアゾ木があるため、二、三月頃か。
- ⑧ バス…観光客用の観光バスと思われる。
- ⑨ 警察官…自転車で警備中のお巡りさん。
- ⑩ タンク…県魚連の油槽タンク。
- ⑪ 墓地
- ⑫ 駐車場…多くの自家用車が停まっている。たくさんの家族旅行客が、コバルトラインを通して鮎川を訪れた。
- ⑬ 作業場…丸浄丸の解体場。
- ⑭ 建物…宮城県漁港事務所鮎川出張所。
- ⑮ 民家…昭和四〇年代でもまだまだ茅葺き屋根の民家が残っていた。

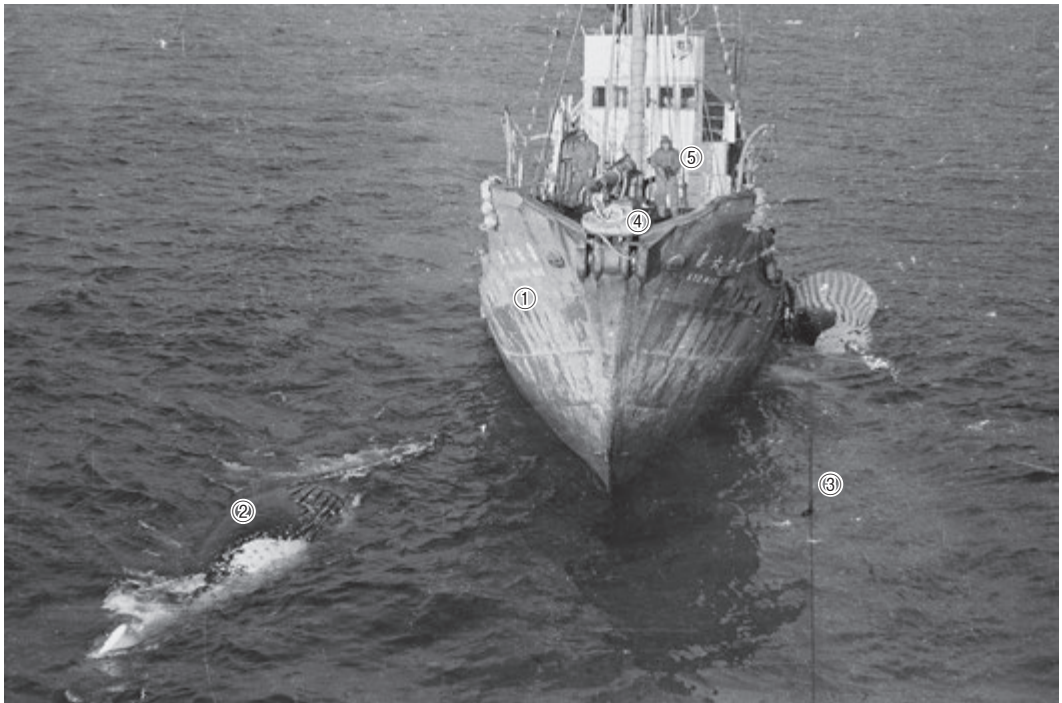
●写真 2-64



昭和三〇年代、鮎川は大型捕鯨の最盛期を迎え、最も景気のいい時期だった。三つの捕鯨会社があり昼夜問わず解剖作業が行われていた。鮎川をはじめ、小型のミンククジラとツチクジラを捕る船を「ミンク船」と言っており、約三〇トンクラスの捕鯨船だった。大型のクジラ（イワシクジラ、マッコウクジラ等）を捕る船を「捕鯨船」（キャッチャーボート、通称キャッチャー）と言っていた。この写真は大洋漁業（現・マルハニチロ）の事業所にあった解剖場の様子である。解体のことを鮎川の人は「解剖」と呼んでいる。

- ①クジラ…解剖途中。鮎川で捕るのはイワシクジラとマッコウクジラが主だった。イワシクジラー頭の解剖にかかる時間は約三〇分と驚くほどスピーディであった。
- ②長靴…床が油で滑るため、滑り止めつき。もっと昔はわらじだった。
- ③大包丁…肉と皮を鯨の体から切り離す際に使用する。大包丁を持っている人は後に、町の議員になった。
- ④チェーン…クジラをチェーンで引っ張りながら切った。
- ⑤床…クジラから出た油と血で光っている。
- ⑥ワイヤー…肉と皮の間に包丁で切り込みを入れ、そこにワイヤーを掛けて、皮を外した。大包丁・チェーン・ワイヤーを組み合わせる解剖は行われた。
- ⑦排水溝…血や油が流れていく。海まで続いたらしい。
- ⑧解剖後のクジラ…解剖されている。肉や骨全てに使い道があり、捨てる部位は肺くらいしか無い。
- ⑨小包丁…肉や皮を裁割時に使用された。鉤のような「ノンコ」も使用されていた。
- ⑩解剖所…危険なので一般の人は立ち入れなかった。ただ、入らなければよいので外から様子を見る人も多かったとか。この写真も外から撮ったもの。クジラの臭いが充満していて臭かった。クジラの解剖時の臭いの元は、腸から出る内容物であった。
- ⑪男性…クジラを解剖している。一頭の解剖には五～七人必要だった。

●写真 2-69



極洋捕鯨の第6京丸の写真である。クジラは死ぬと海に沈んでしまうため、捕獲後、体内に圧搾空気を注入しラジオブイを付け、また次の捕獲に向かう。ブイを付けたクジラは曳鯨船が収容して母船に渡鯨して解剖した。

- ①船…極洋捕鯨の第六京丸。乗組員は約二〇名。
- ②鯨…鉋が撃ち外れると「ドンガラ」、一発で仕留めると「パンコロ」と言っていた。クジラが苦しまないように二番鉋、三番鉋も撃つこともあったという。
- ③ワイヤー…しとめた鯨を引っ張ってくるワイヤー。
- ④砲台…捕鯨砲を撃ち鉋を飛ばすところ。ロープでつながっており、鉋は返しが付いているので一度刺さると抜けなかった（鮎川で開発された平頭鉋）。防波堤の付け根に練習台があった。
- ⑤船動員…船員さんは防寒具と防寒帽をかぶっており、南氷洋と思われる。戦後南氷洋捕鯨に従事すると当時は家一軒が建つくらいの収入があったと言われている。

●写真 3-17



オオアミと呼ぶ大謀網（大規模定置網）の水揚げ作業の様子。大謀網は初代町長である鈴木良吉の家で行っていた。場所は金華山沖で、男性中心に四〇～五〇人で働いていた。定置網の統括者をダイボウ（大謀）と呼んだ。

- ①大網…乗っている人が左に寄っているため、船もその方向に傾いている。網を引くときは全員で「ヨイトーヨイトー」と言った。
- ②男たち…また八～九割が岩手県宮古あたりの出身の人たちであり、出稼ぎのために来ていた。
- ③舟…作業用で魚を積み、エンジンのない舟を「ダンベ船」と言った。
- ④服装…鉢巻、合羽、アームカバーをしている。合羽、アームカバーに関しては海上での仕事のため、水を弾く素材だった。作業員はみな鉢巻をしている。
- ⑤つなぎ…船が離れないようにロープでつなぎをかけている。
- ⑥波…穏やかである。

●写真 4-9



牡鹿鯨まつりで行われる仮装行列出発前に、当時の牡鹿町役場の前で撮った記念写真。クジラのかたちをした山車は中央が開いてステージになる。写っているのは仮装した婦人会の方々と、鯨を解剖する大包丁を持ったり、丸眼鏡や帽子を被ったりしている。

- ① 鯨のオブジェ…紙でできている。
- ② 婦人会の会長…「鈴喜商店傘」で鮮魚と塩を売っていた方。運送業もしていた。
- ③ 側溝…砂利道のためすぐに土が積もってしまうため、掃除しやすいように蓋がない。
- ④ 女性たち…北中地区の会社の女性だと思われる。鯨解剖の大包丁の作りものを持っている。他の女性たちは各自「阿部三商会」「鮎川港鈴喜商店」などと会社名の書かれた法被を身に着けている。
- ⑤ 学校の暗幕を借りてきた。
- ⑥ 牡鹿町役場…バルコニーがありモダンな建物
- ⑦ 万国旗
- ⑧ 荷車…太鼓などの楽器を運ぶのではないか
- ⑨ 子供達…運動靴とバックを持っている。当時としては珍しい。
- ⑩ 砂利道…傾斜で右側の方が高いのは道が舗装されていない砂利道のため。道路が舗装されるのは昭和45年のコバルトライン開通後から。

●写真 4-10



①

鮎川橋からメインストリートに向かって撮影された鯨まつりの写真。地面はまだ舗装されていない。舗装されていないところにこれだけの人が集まれば、砂ぼこりが舞っていたことであろう。

- ①撮影ポイント…鮎川橋の上から撮影。道幅は大体7～8m。
- ②リヤカーヤ商店…リヤカーの修理・販売をしていた。後に下駄や塗料も販売。屋根はスレートで、2階からお祭りをしている。
- ③住宅…カクトさんの洋風住宅。
- ④東洋館…お酒や薬を売る雑貨屋。「菊水」という日本酒を売っていた。ミネビタールという看板が見える。
- ⑤本間屋商店…雑貨屋。石巻の「福の玉」という日本酒を売っていた。ケーキや雑誌も販売。
- ⑥ヤマキ商店（鈴木のタナ）…有名な名物おかみさんがおり、魚や塩などを売っていた。また運送業も行い、後に酒販売の許可を取って酒を販売するなど手広く商売をしていた。
- ⑦鮎川電機商会…後の牧電機。
- ⑧呉服店…平岩呉服店
- ⑨洋品店…伊藤洋品店
- ⑩商店…フジヤ
- ⑪島家…大きい蔵を持っていた。
- ⑫鮎川映画劇場…鯨まつりの日は劇場内でも出し物をしていたか。
- ⑬七夕飾り…鯨まつりのためにみんなで作った。竹は金山地区の竹やぶから取って来る。飾りはあくまでも鯨まつりのための装飾であった。
- ⑭女性…証城寺の狸の仮装をしているのは体格の良い女性。
- ⑮白虎隊の仮装…地区ごとに婦人会の女性たちが仮装をする。看板には「花の白虎隊」とかいてある。
- ⑯侍姿の男性…バレードの順番待ちをしているのか。
- ⑰演奏隊…トラックの上でアコーディオンなどを弾く。

●写真 4-18



若い女性たちが、三輪トラックの荷台で楽しそうに花笠を踊っている。場所は鮎川橋付近で、踊っているのは鮎川南地区婦人会の方々。牡鹿鯨まつりではいつも女性が大活躍であった。トラックの上に乗ったまま鮎川中を移動し、目的地に着くとショーとして踊り、また次の目的地まで移動する。鹿井清介さんは、三輪トラックの荷台をはっきりと写すために鮎川橋の欄干から撮ったそうだ。

- ①三輪トラックの舞台…三輪トラックの荷台の上。移動しながら所々で停車し、ショーを行う。周りには子どもと同じくらいの高さのため、それほど高さはない。
- ②建物…銭湯の「鮎川浴場」。銭湯はもう一か所「鈴ノ湯」がある。
- ③男性…カメラを持ち、橋の欄干に上がり写真を撮っている。撮影者の鹿井さんも同じように欄干に上がっているため、この男性のカメラに写っているかもしれない。
- ④屋根…極洋捕鯨の捕鯨船員らが集う「極洋会館」の屋根。
- ⑤手ぬぐい…鮎川音頭の全歌詞が入っている。

●写真 4-22



牡鹿鯨まつりの仮装行列の様子である。西町地区の人々が仮装し練り歩いている場面であり、後ろの方では「ミス・西町」の女性三人組がドット（水玉）のワンピースを着て並んで歩いている。

- ①看板…「ミス・西町」の看板。「栄冠は私、応募者 5,000 人中から厳選 就職、嫁の口、養子」と後ろに書かれている。三人のミス・西町の女性がドット（水玉）のワンピースを着て並んでいる。
- ②看板…「祝鯨祭り、極洋捕鯨・大洋漁業」。
- ③行列…楽器を持った鼓笛隊のような仮装。
- ④道路…砂利道。水はけが良いように道の中央が盛り上がっている。
- ⑤トラック…装飾されたトラック。
- ⑥門…サカナのイラスト。
- ⑦装飾…裸電球がいくつも吊ってある。
- ⑧屋根…別の写真と比較するとリアカーの看板がなくなっており、別の年とわかる。
- ⑨懐中時計…男性の右ポケットに入っている。
- ⑩鮎川橋…一九五七（昭和三二）年完成。
- ⑪仮装…チンドン屋。ノリノリである。
- ⑫屋根…スレート屋根の建物。屋根を軽くできるため大きな建物によく用いられた。雄勝石や井内石で作られている。

●写真 4-23



牡鹿鯨まつりの仮装行列。鮎川橋前で撮影された、南地区の写真である。牡鹿鯨まつりは県内外から多くの観光客が訪れ、出店が出されるようになるとさらに賑やかなものになったという。仮装行列は各地区の婦人会がそれぞれ趣向を凝らして企画するもので、奥に見える旧牡鹿町役場からスタートした。仮装行列で練り歩くルートは日によって異なり、テーマもその時々で違ったという。中央にうつる女性は当時流行していたトニー谷の仮装で、こうした仮装で使う物は全て自分で調達していた。第一回鮎川鯨まつりに参加した人の話では、家一軒から必ず一人仮装行列に参加しなければならず、全員で作り上げるイベントといった雰囲気があった。

- ①看板…「祝鯨まつり」とある。
- ②女性…当時人気だったコメディアン「トニー谷」の仮装をしている。みなみ荘の女将さん。
- ③仮装行列…女性達が仮装をし、小太鼓などを鳴らしながら町を一周した。地区ごとに仮装のテーマは異なり、年によっても変化していた。当時は鮎川の住民だけではなく、牡鹿半島の表浜地区・裏浜地区の人々も参加した。
- ④前掛け…船の帆と同じ生地が使用されていたため「ほめかけ」（帆前掛けの意）と呼ばれていた。「宝城製菓」という石巻市の金昆羅通りにある菓子屋の名前が書かれている。電話番号は 1929 とあり、当時は四ケタだった。
- ⑤そろばん…仮装の道具。「トニー谷」はそろばんを楽器のように鳴らす芸風であったため、仮装として大きなそろばんを持っている。そろばんは、この女性の娘が通っていたそろばん教室のものを拝借したという。
- ⑥笠…仮装の一部。笠の上に白い旗がたくさん刺さっている。
- ⑦旧役場…当時の牡鹿町役場。仮装行列のスタート地点。
- ⑧ナトリ自転車…自転車屋。リヤカーも販売していた。のぼりには「最高の品質」という文字がみえる。
- ⑨女性達…花笠を被っている。前の女性達とは格好が違うため別の地区の団体だと考えられる。のぼりに書いてあるのは「大漁花笠」か。
- ⑩お立ち台…ここで出し物を披露か。
- ⑪提灯…「金兜」という酒の名前が書いてある。金兜は石巻で醸造され、鮎川では本間屋・寿屋・菅井商店で販売していた。
- ⑫日傘…日差しが強いと思われる。影が短いことからお昼ごろだと予測できる。
- ⑬子ども達…大勢いる。母親などが行列に参加しているのか。
- ⑭観客…県内外から多くの人が訪れていた。そのため宿泊業もかき入れ時だった。
- ⑮万国旗…当時は運動会などイベント時に必ずと言っていいほど使われた。
- ⑯洗濯物…祭りの最中でも、いつもと変わらない日常風景。
- ⑰子ども…建物の二階から祭りを見学している。

●写真 4-33



牡鹿鯨まつりの仮装行列の様子である。山車の船に「北中丸」と書いてあるため、北中地区の出し物だとわかる。捕鯨船を模した三輪トラックの上には乗組員の格好をした女性たちが乗っている。普段は男性の仕事である捕鯨を、仮装として女性たちが真似しているのだろう。

- ①女性…水夫長役。さか井の女将さん。ボースン（船の甲板長）の役になりきっている。
- ②装飾…捕鯨船を模した出し物。「北中丸」と書いてある。
- ③門…この祭りのために用意された。
- ④女性…婦人会の人が車をひっぱっている。
- ⑤女性…砲手役。
- ⑥女性…船長役。
- ⑦男性…上の障害物を避ける係。
- ⑧男性…漁師をしていた清松さん。
- ⑨国旗…国旗は学校からの借り物。
- ⑩日傘…晴れている。かなり暑そうだ。
- ⑪男の子…頭から顔まで包帯を巻いている。お祭りが好きで無理して来たのだろうか。
- ⑫男性…モダンな帽子を被っている。旧家の旦那役場の助役さんか。

●写真 4-35



牡鹿鯨まつり、映画館近くでの仮装パレードの様子である。近くに粟野旅館がある。映画館は鮎川の中心部にあった。

- ①七夕飾り…各自の店や、鯨まつり実行委員会で作成したものか。
- ②看板…映画のタイトル。看板には「大菩薩峠」と書いてある。菅原都々子さんが2回程訪れた。石原裕次郎時代の映画。
- ③仮装している人々…踊りながら移動している。ハタ屋の娘もいる。
- ④窓から覗く人…学生帽を被っている。中学生か。
- ⑤場所…写真 4-36 と同じ場所
- ⑥男性…鮎川に一軒の船大工。
- ⑦男性…ハシモトさん。消防団幹部、鮎川捕鯨社長の和泉恒太郎さんの息子さん。
- ⑧女性たち…大漁踊りを五十集（イサバ、魚売り）の服装で踊っている。
- ⑨男性…島さんの弟。ミナトパーマの旦那。
- ⑩看板…「パン 喫茶」の文字。フジヤさんの店。
- ⑪子供…こちら側に子どもたちが集まっている。
- ⑫建物…七十七銀行鮎川支店

●写真 4-36



牡鹿鯨まつりの仮装パレードは南地区・金山地区・北下地区・北中地区・西町地区など地区ごとに行われた。この写真は南地区婦人会の方々の様子を撮ったものである。箱に魚を入れて売り歩く五十集の仮装をし、「民謡ばやし大漁道中」に合わせて踊っているようだ。奥に見える三輪トラックには「御囃子部隊」が乗っている。

- ①トラック…ヤマキさんのトラック。三輪トラックは鮎川に2台のみ。
- ②男性…チョウロクさん。
- ③男性…鮎川に一軒の船大工さん。
- ④飾り…南・金山・北下・北中・西町の地区ごとに仮装行列を行う。南地区のパレード。太鼓が乗っている。
- ⑤建物…七十七銀行。昭和25年に七十七銀行鮎川支店に昇格した。
- ⑥男性…ブンタロウさん。肥料工場の方。
- ⑦飾り…ふきながし
- ⑧おはやし部隊…トラックの荷台に乗っている。
- ⑨消防団員…警備をしている。地下足袋の人と、革靴を履いてる人がいる。
- ⑩広場…この場所は通りが少し広くなっており、パレードは一旦ここで止まって踊りなどを披露する。写真の画角が高いため、この通りにあった栗野旅館の二階から撮った写真だと考えられる。
- ⑪子どもたち…女の子はおかっぱ、男の子は坊主とぼっちゃん刈。
- ⑫前列には、チヨちゃん、アサちゃんや、後列にはモトコさん、フキさん、ウサちゃん、タケコちゃんが躍っている。

●写真 4-39



毎年恒例の八月の牡鹿鯨まつり、午前中の鯨まつりの仮装行列の様子。一九五〇年代なかばの粟野旅館前広場の写真である。子供や大人たちの和気藹々とした雰囲気伝わってくる。影がはっきりと地面に写っていることや女性が日傘を差していることから、とても天気の良い夏の日だったことが窺える。中心で目立っている三輪トラックには手作りの様々な装飾がなされており、大きなタコを中心に鯉のぼりのようなものや万国旗が吊るされている。トラックの側面には波と魚のイラストなどが描かれておりとても派手にぎやかである。スピーカーも付いており、そこから音楽や鮎川音頭などを流しているのだろう。周りには多くの人が集まっており、車を誘導する役場職員・消防団員・商工会員の人達が正面に写っている。

- ①藤屋商店（サイトウさん）…看板には「パンと喫茶」の文字。2階は住まいで、1階では和菓子か洋菓子を販売していた。鮎川では、まだクリスマスケーキが普及するまえからこうした店舗でケーキが販売されていた。奥津商店よりも古くからの店だといい、後に肉屋・惣菜屋となる。
- ②三輪トラック…ヤマキさん（魚屋）のトラック。鮮魚と塩を売っていた。肥料工場、運送業も行っていた。鮎川では、こうした運送業者や工場で、早くから三輪トラックが行き来していた。
- ③倉庫…ミンク船（地元の人々が操業するミンクジラの捕鯨船）の船主だった鳥さんの石蔵。塩釜石でできている。
- ④道路…右側には金華山の一の鳥居（女人禁制の時期からの遥拝所）への道。舗装路以前の砂利道だった。
- ⑤クジラ館診療所…鮎川の診療所の看板。診療所は公民館の裏にあり、もともと戦前に作られた鯨館（展示施設）の場所に立っていたためこの名がある。
- ⑥消防団員…お祭りの警備をしている。消防団員の他にも役場職員や商工会員の人達が祭りの警備をしていた。
- ⑦飾り…タコは婦人会の手作り。足に持っている扇子には「大漁」の文字。
- ⑧ふきながし…七夕のふきながし。裏の通りにもふきながしがあり、お祭りに合わせて装飾。仙台七夕にならって、にぎわいを生み出すために牡鹿鯨まつりでも派手に飾られた。
- ⑨壁文字…「劇場」の文字。これは映画館で、町として栄えた鮎川の娯楽として人気を博した。劇場としても使われ、牡鹿鯨まつりでは歌手のショーや演芸が催された。
- ⑩引率…沿岸の観客が出てこないように警備をしているのか。
- ⑪男性達…三人の男性。人が多いからか、家の二階から見ている。
- ⑫男性…人混みで何かに乗って仮装行列を見ている。
- ⑬荷台…三輪トラックに装飾をつけて荷台に人が乗っている。
- ⑭スピーカー…アナウンスを流しながら仮装行列を先導していた。
- ⑮足…人影があるためトラックを誘導している。警備員が周りに多くいる。
- ⑯旗…魚の形。こいのぼりを転用か。
- ⑰万国旗…運動会の万国旗。
- ⑱絵…波と魚のイラストが描かれている。
- ⑲トラックの上の男性…鮎川電機商会のオヤジ。

●写真 4-44



昭和 30 年頃の鯨まつりの写真。高い位置から撮影されており、障害物が全くないことから、鮎川漁協前の岸壁に停泊していたミンク船の上から撮影されたものと思われる。当時船には、地元の人であれば自由に乗ることができたそうである。

- ① 鮎川魚市場…2 階には事務所がある。鯨まつりの様子を見ているのは、漁協関係者の家族などではないか。
- ② 鯨館診療所の看板…パレードのトラックの幕で隠れている。小野先生が診察していたため、小野医者と呼ばれていた。診療所は別のところにありこれは看板のみ。小野先生はスクーターに乗って、町内を回診していたようだ。
- ③ 奥津まんじゅう…製菓店。鯨まんじゅうを販売していた。中にはぎっしりあんこが入っていた。網地島の人たちが鮎川に来た時にお土産、贈答品としてよく購入していった。
- ④ ミス西町のパレード…10 代くらいの女子が当時かなり珍しいミニスカートをはいて、踊っている。よく見ると、シニア世代の女性もミス西町として乗っている。
- ⑤ 西町パレードの警備…消防団の人で、法被、もんぺ、地下足袋を身に着け、警察官の帽子をかぶり警備をしていた。法被には「おしか」の文字が入っていることから、この写真は昭和 30 年の牡鹿町合併後の写真と思われる。
- ⑥ パレードを見物している観衆…下駄を履いている人が多い。当時サンダルはハイカラなもので、下駄が主流だった。また日傘をさしている人も多い。写真の手前側は海になっており、岸壁ぎりぎりまで人が立って見物していたようだが、海に落ちる人はいなかったようだ。
- ⑦ ゲート…通常「歓迎」の文字が書かれているが、鯨まつりに合わせた仕様になっている。昭和 28 年の写真にはゲートは映っておらず、それ以降に設置されたものではないかと思われる。ゲートの柱には魚の絵が描かれている。
- ⑧ 焼き鳥友ちゃん（酒蔵）…友ちゃんが経営しているお店。
- ⑨ 電柱…昭和 16 年に鮎川に変電所ができて以来、一般家庭にも電気が普及した。木の電柱は防腐剤替わりにコールタールが塗ってあり、触るとべたっとして手が黒くなった。木の電柱は平成に入ってからもあった。電柱には防犯灯がついていて、町が管理をしていた。各行政区で防犯強化費が徴収され、球が切れたりするところのお金が使われた。
- ⑩ 仮装した女性…おそろいの法被とはちまきを身に着け、しゃくじょうを持っている。どや節を歌っていた。

●写真 4-45



昭和 34 年（1959）頃に海岸通りで撮影された鯨まつりの写真である。南国にあこがれた女性たちのハワイアン風の仮装を収めた 1 枚。写真に写る子どもたちの服装がとても都会的であることから当時の好景気がうかがえる。

- ①丸本組の鮎川事務所…その後飲み屋などへ店舗が変わっていった。
- ②中華料理店上海楼…鮎川支店の看板が見える。本店は石巻市横町（現在の住吉町あたり）。今の店主は横浜中華街で修行してきた。半チャンラーメンがおすすめ。「波の音」の看板（石川酒造店）が見える。
- ③今留商店（こんとめ）…クジラの買い付け、小売りを行っていた。クジラが揚がるとブロックで鯨肉を買い付けしてきて、店で一晩中小分け作業を行っていた。昭和 60 年代まで小売りを行っていた。この前は栗野旅館の近くに店があった。その前は栗野旅館の斜め向かいの空き地でボン菓子をやっていった。
- ④鈴吉汽船の荷捌き場…石巻から来た荷物をリヤカーで配達したり、受け渡しを行っていた。今でいう宅配収集センターであった。鈴吉汽船は今の石ノ森漫画館の向かい側に船着き場があって、そこから船が出ており十八成を経由して鮎川と石巻を行き来していた。荷捌き場のところにパチンコ屋の看板があるが、パチンコ屋は荷捌き場の裏にあった。パチンコ屋は元々「すずのゆ」という銭湯であった。
- ⑤鮎川釣り具センター…スズキの代理店でもあり、自転車の修理をしながら釣り具も売っていた。奥の方に「ヨコハマタイヤ」と「ブリヂストン」の看板も見える。
- ⑥かきあめの看板…喜栄で売っている。かきあめは高価であった。カキエキスが入っている。他にも大玉でカラフルなザラメがついた飴玉もよく食べていた。
- ⑦万国旗…鯨まつりのための装飾。
- ⑧女性…ハズレ（屋号）の奥さん。
- ⑨女性…鮎川電機商会の奥さん。
- ⑩女性…チヨちゃん。
- ⑪阿部喜のスタンドのマーク…鯨歯工芸店の千々松さんの家の隣で本店は女川にあった。船へ向けて重油を売っていた。防波堤のところにパイプがあって、そこに船を横付けして、燃料を補給していた。氷も売っていた。
- ⑫八竜丸漁業の解剖場…八竜丸は牡鹿町長も務めた渡辺諭さんが創業した。ミンク船や旋網をやっていた。
- ⑬パレードを見物している子どもたち…下駄などではなく、運動靴を履いている。服装も都会的である。
- ⑭見物人…足が見える。2 階から見物する人がいたようである。
- ⑮少年…水風船を持っている。出店で買ったものか。
- ⑯ハワイアン…南国にあこがれた女性たちの仮装。

●写真 4-109



牡鹿鯨まつりの夜に行われる名物・花火大会。花火が始まると海岸いっぱい人が集まった。花火大会はだいたい二時間程度で、花火は何回も船を往復させてあげていた。打ち上げ花火と一緒に水中花火をあげている。当時の鯨博物館前から湾内に向けて撮った写真で、迫力のある花火が画面いっぱいに写っている。鹿井清介さんのお気に入りの一枚。

- ①水中花火…「タネ」を水中に落とし、時間になると花火があがる。鮎川には花火師がいなかったため、花火は「芳賀火薬屋」が作っていた。花火師専用のボートがあり、それに乗って花火を海に流していたという。船は花火を落としてすぐにその場を離れないと巻き込まれてしまうので、操縦を任されるのは腕が確かな証拠だった。
- ②重なる花火…カメラのシャッターを「開放」にして、うちわをレンズに被せたり開いたりすることで、花火を何発も多重露光して撮影した。
- ③捕鯨船…大洋漁業の捕鯨船（キャッチャーボート：通称キャッチャー）隣りは極洋捕鯨の第二おとり丸。
- ④大洋漁業のマーク…「㊦」と書いてある。当時の大洋漁業（現・マルハニチロ）の前身「(株)林兼商店（はやしかねしょうてん）」の屋号のマーク。大洋漁業は北洋の鮭・鱈事業を行っていたが、南氷洋捕鯨に進出するようになった。
- ⑤栈橋…花火を間近で見ようとする人でいっぱいである。
- ⑥橋…ランナーブリッジといい、ブリッジ（船橋）と砲台に固定されたつり橋状の橋。砲台の所へ直接行ける歩道橋。砲手（通称：テッポウさん）が主に通る通路。

●写真 5-31



浜の棟梁・鹿井清介さんの家族写真。仕事の合間に作業小屋（バラック）で休憩している。鮎川では休憩することを「たばこやっぺす」と言う。日の差し込み具合から午後三時の休憩であろう。

- ①帽子…耳当てつきの帽子。紐で結んである。
- ②電動のこぎり…木を切る道具。上下するハンドルで木材の厚さを決める。
- ③機械…建具の穴を振る機械。
- ④干し柿…アンボ柿。
- ⑤野球帽…「A」というマークの野球帽。当時は捕鯨会社ごと、役場や工場などの職場ごとに野球チームがあり牡鹿鯨まつりでは野球大会が開かれた。さながら実業団リーグのような様相を呈していた。
- ⑥おやつ…リンゴを剥いている。野球帽の青年も食べている。
- ⑦おやつ…漬け物だろうか。子どもが興味を持って手を伸ばしていてかわいらしい。
- ⑧ほっかむり…かつて女性は作業をするときに必ずほっかむりをして、着け方や模様の見せ方などでちょっとしたオシャレをした。

●写真 6-44



金華山の初巳大祭の神輿渡御の様子である。鮎川の若者達が神輿を担ぎ、清めの塩を撒いた道を進む。観客も多く、邪魔にならない場所で見学をしている。現在は港湾の岸壁が整備されているが、当時は道からすぐに砂浜に降りることができた。

① 公衆便所

② 休憩所…鈴吉汽船の無料休憩所。石巻と鮎川、金華山などを定期船で結んでいた。

③ 看板…「鈴吉汽船株式会社」とある。

④ わらじ…切れたり落ちたり持って帰る人も。二足、三足と用意していた。

⑤ 担ぎ手…本来は二〇歳の男性が担ぐ。鹿井さんは一九歳と二〇歳のときに担いだ。当時は鮎川の人だけが担いでいたので人が足りなかった。

⑥ 神輿…普段は神輿蔵に安置されているが、一年に一度これにご神体を移して浜へ降りる。

⑦ 観客…金華山講のある山形・福島・岩手からの来客が多かった。

⑧ 塩…お清めの塩をまいた所を神輿が通る。

⑨ 牡鹿消防団の団員…当時から共同・共助の意識が強く消防団員も多かった。神輿渡御の警護にあたっている。秋になると「カマド調査」を行い、団員が毎戸のカマドの使用状況を調査して歩いた。

●写真 6-45



金華山の棧橋近くで撮られた初巳大祭の写真。若者や観光客が多く見られる。神が力を蓄える為の浜降りと塩汲みの儀礼のときの写真。

①建物…御旅所の横の社務所。

②御旅所

③箱…餅屋のアイスクャンディー。

④担ぎ手…神輿の担ぎ手が休憩している。服が濡れていることから浜降り後の様子だとわかる。現在は各浜から担ぎ手を出して協力して神輿渡御を行うが、当時は鮎川の男性だけで神輿を担いだ。

⑤見学者…女性や子ども、生徒などが見物に来ている。

●写真 6-56



一九五三（昭和二八）年一月に撮影された、一の鳥居から金華山を拝んでいる写真である。金華山はもともと女人禁制であったため、女性はここから参拝した。近代以降は解禁されたが、この頃はまだ島に渡るのを遠慮する女性も多かった。

- ①人物…左から叔母、従兄弟、叔母の従兄弟。
- ②縄…正月に注連縄をかける。
- ③景色…当時は立木がほとんどなく金華山がよく見え、三六〇度景色が見えたという。周囲は黒松の松林であった。
- ④扁額…「金華山」とある大きな扁額。
- ⑤地面…東日本大震災以降はとくにシカの生息域の拡大によってヤマビルがいたるところに潜んでいる。
- ⑥島影…海峡を挟んで臨む金華山。

1. 風景

旧鯨博物館前、ケンジ墓、御番所公園など鮎川には町並みを一望できる場所がいくつかある。これらの場所から鹿井さんは鮎川の風景を何度も撮影している。中にはパノラマ写真のようにつながるものもあり、60年前の鮎川の様子がよく分かる。



1-1



1-2



1-3



1-4



1-5



1-6



1-7



1-8



1-9



1-10



1-11



1-12



1-13



1-14



1-15



1-16



1-17



1-18



1-19



1-20



1-21



1-22



1-23



1-24



1-25



1-26



1-27



1-28



1-29



1-30 のり浜



1-31



1-32



1-33



1-34



1-35



1-36 黒崎



1-37



1-38



1-39



1-40



1-41



1-42



1-43



1-44



1-45 網地島



1-46 網地島



1-47 網地島



1-48 網地島



1-49 網地島



1-50 網地島 木村旅館



1-51 網地島から鮎川を望む



1-52 網地島長渡港 久丸



1-53 女川港

2. 捕鯨

1906（明治 39）年、東洋漁業株式会社が鮎川に初めて捕鯨基地を設立したことがきっかけで始まった捕鯨業は、昭和 30 年代ピークを迎える。鹿井さんが写真を撮り始めた頃、鮎川はちょうど捕鯨のピークを迎え、仕事を求めて全国から集まってきたたくさんの人びとでにぎわっていた。町には独特のクジラのにおいが常に漂っており、いつも身近にはクジラがあった。港にはクジラをかかえた捕鯨船が昼夜を問わず入ってきた。そんなクジラの町・鮎川ならではの風景・町並みが映し出されている。



2-1



2-2



2-3



2-4



2-5



2-6



2-7



2-8



2-9



2-10



2-11



2-12



2-13



2-14



2-15



2-16



2-17



2-18



2-19



2-20



2-21



2-22



2-23



2-24



2-25



2-26



2-27



2-28



2-29



2-30



2-31



2-32



2-33



2-34



2-35



2-36



2-37



2-38



2-39



2-40



2-41



2-42



2-43



2-44



2-45



2-46



2-47



2-48



2-49



2-50



2-51



2-52



2-53



2-54



2-55



2-56



2-57



2-58



2-59



2-60



2-61



2-62



2-63



2-64



2-65



2-66



2-67



2-68



2-69



2-70



2-71



2-72

3. 漁業

世界三大漁場である金華山沖を有する鮎川は捕鯨業とともに漁業も盛んであった。大謀網と呼ばれる大型定置網漁が行われた。一攫千金を夢見て海で働く男の姿が収められている。



3-1



3-2



3-3



3-4



3-5



3-6



3-7



3-8



3-9



3-10



3-11



3-12



3-13



3-14



3-15



3-16



3-17



3-18



3-19



3-20



3-21



3-22



3-23



3-24



3-25



3-26



3-27

4. 鯨まつり

昭和28年（1953）、初めて鯨まつりが開催された。消防団が中心になり、町民一同が参画し、各地区の婦人会のメンバーが工夫を凝らした仮装パレードが行われるようになった。鮎川の人びとは毎年この日を心待ちにしており、仕事を休み祭りに参加する人もいたという。町の外からも見物客が押し寄せ、当時の好景気を象徴する祭りであった。



4-1



4-2



4-3



4-4



4-5



4-6



4-7



4-8



4-9



4-10



4-11



4-12



4-13



4-14



4-15



4-16



4-17



4-18



4-19



4-20



4-21



4-22



4-23



4-24



4-25



4-26



4-27



4-28



4-29



4-30



4-31



4-32



4-33



4-34



4-35



4-36



4-37



4-38



4-39



4-40



4-41



4-42



4-43



4-44



4-45



4-46



4-47



4-48



4-49



4-50



4-51



4-52



4-53



4-54



4-55



4-56



4-57



4-58



4-59



4-60



4-61



4-62



4-63



4-64



4-65



4-66



4-67



4-68



4-69



4-70



4-71



4-72



4-73



4-74



4-75



4-76



4-77



4-78



4-79



4-80



4-81



4-82



4-83



4-84



4-85



4-86



4-87



4-88



4-89



4-90



4-91



4-92



4-93



4-94



4-95



4-96



4-97



4-98



4-99



4-100



4-101



4-102



4-103



4-104



4-105



4-106



4-107



4-108



4-109



4-110



4-111



4-112



4-113



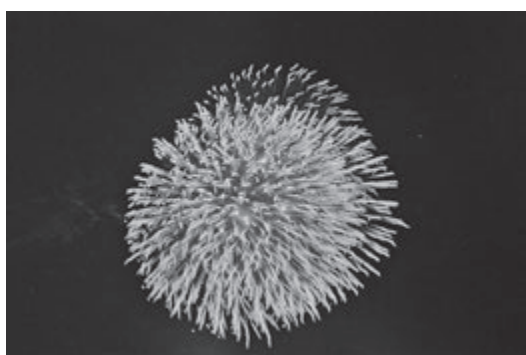
4-114



4-115



4-116



4-117



4-118



4-119



4-120



4-121



4-122



4-123



4-124

5. 暮らし

当時カメラを持つ人はまだいなかった時代、どこへ行くにもカメラを持つことを忘れなかった鹿井さん。時には仕事中でも夢中になって写真を撮り続けた。熱狂する鯨まつりとは対照的な鮎川の穏やかな日常風景が映し出されている。



5-1



5-2



5-3



5-4



5-5



5-6



5-7



5-8



5-9



5-10



5-11



5-12



5-13



5-14



5-15



5-16



5-17



5-18



5-19



5-20



5-21



5-22



5-23



5-24



5-25



5-26



5-27



5-28



5-29



5-30



5-31



5-32



5-33



5-34



5-35



5-36



5-37



5-38



5-39 山鳥の堤防



5-40 山鳥の堤防

6. 金華山

蛇を使いとする弁財天を祀る金華山・黄金山神社。金華山講が組織され、鮎川の人びとだけでなく県外からも参拝に訪れる人が絶えなかった。毎年5月には1週間かけて初巳大祭が行われる。鮎川の若者は神輿を担ぎ、地元の捕鯨会社も無料で見物客を金華山へ渡した。初巳大祭のにぎやかな雰囲気、金華山の荒々しい自然、対照的な2つが写真に収められている。



6-1



6-2



6-3



6-4



6-5



6-6 千畳敷



6-7 千畳敷



6-8 千人沢



6-9 千人沢



6-10 千人沢



6-11



6-12



6-13



6-14



6-15



6-16



6-17



6-18 仁王崎



6-19



6-20



6-21



6-22 金華山ホテル



6-23 金華山ホテル



6-24



6-25



6-26



6-27



6-28



6-29



6-30



6-31



6-32



6-33 天柱石



6-34



6-35 金華山灯台



6-36



6-37



6-38



6-39



6-40



6-41



6-42



6-43



6-44



6-45



6-46



6-47



6-48



6-49



6-50



6-51



6-52



6-53



6-54



6-55



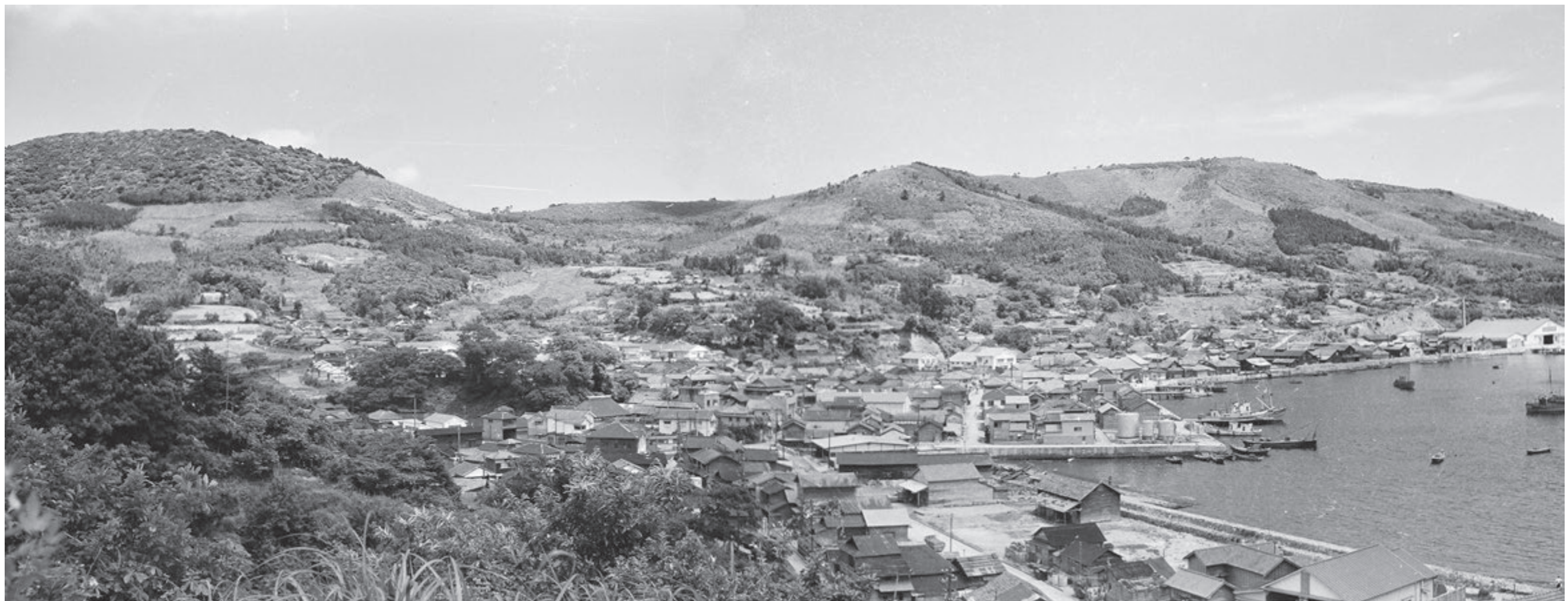
6-56



6-57



⑬の事業所と煙突、そして昭和41年建設の漁民アパートが写っており、これからコバルトラインが開通し、鮎川が捕鯨から観光へと移り変わる節目の風景写真です。(成澤)



昭和35年頃の鮎川の風景写真ですが、なぜか写真から温もりが伝わり、心に残る風景です。(成澤)



港内に日本近海捕鯨のキャッチャー「第2勝丸」が停泊しており、全体にのどかさが感じられる風景です。(成澤)



コバルトライン開通により一挙に車と観光客が押し寄せました。(成澤)



金山の田んぼや鮎川小学校と鮎川中学校のなつかしい校舎が写った風景です。(成澤)



現在より緑が多く雄大な金華山。(成澤)